

高校での教育活動

高校での新しい学力・能力の育成と大学入試

平成 25 年度から高校での新学習指導要領が全面実施されている。新学習指導要領では、新しい学力観やその育成方法について示されているが、本調査でも、重視して取り組むべき事項として掲げられている学習や活動について、実施前との変化をたずねた。その結果、「言語活動」は 64.8% の高校が「増えた」（「かなり増えた」＋「少し増えた」の％）と回答、「アクティブラーニング（グループワークや討議、プレゼンなど生徒の能動的参加を取り入れた授業）」が、52.9%、「キャリア教育」も 51.8% と、半数以上の高校で「増えた」としている（図 3-1）。高校の教育は変化しつつあるといえるだろう。特に「キャリア教育」は、普通科の四年制大学進学率の低い層ほど「増えた」との回答が高く、進学率「30% 以下」の高校では 62.5% におよんでいる（図 3-2）。従前より普通科におけるキャリア教育の必要性については、指摘のあるところだが*1、進路多様校での変化が大きいようだ。

また、新しい学力・能力の育成については、意識の面でも、「高校でディスカッションやグループワークなど、講義以外の授業方法をもっと取り入れたほうがよい」「高校で今以上に探究的な活動を充実させたほうがよい」はいずれも肯定率（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％）が 8 割を超えており、その必要性を感じているようだ（図 3-3）。しかしながら一方で、「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」と高校の 53.9%（「とてもそう」＋「まあそう」の％）、普通科のみでは 57.9% と、6 割近くが感じている（図 3-4）。新しい学力・能力の育成と大学入試への対応のはざまにジレンマを感じている高校も少なくなさそうだ。

推薦・AO 入試による早期合格者に対する取り組み

推薦・AO 入試による入学者が、大学入学者の 4 割を超える現在、それらの早期合格者に対して高校側ではどのような取り組みをしているのだろうか。高校全体では「センター試験を受けさせている」が 43.2% と最も多い（図 3-8）。学科別にみると、普通科と総合学科では「センター試験を受けさせている」が最も高いが、専門学科では「補習を行っている」が 43.8% と最も高くなっていることが特徴的である（図 3-9）。専門学科と大学のカリキュラムの溝を埋める努力が高校側でなされているということであろう。一方においては、「特に何も行ってない」という高校も全体の 4 分の 1 程度存在しているが、逆に言えば、4 分の 3 の高校では何らかの取り組みを行っていることになる（図 3-8）。

また、本調査では、大学が推薦・AO 入試による合格者に対して提供する入学前教育について、高校側がどのように感じているかもたずねている（IV 章）。入学前教育を受けている生徒のいる高校（全体の 69.5%）のうちの 81.7% が「大学にはもっと入学前教育を充実させてほしい」と感じており、「入学前教育を受けた生徒の学習意欲が上がる」と 83.0% が感じている（「とてもそう思う」＋「まあそう思う」の％）（図 4-11）。入学前教育に対する高校の期待は高いようだ。

他方、大学側では、推薦入試（一般推薦・指定校推薦）を実施している学科の 69.6%、AO 入試を実施している学科の 79.4% が入学前教育を行っている（図 4-1）。入学前教育を実施している大学では、入学前教育の課題として「大学入学前にどのような教育が必要か、高校との検討が十分にできていない」と、64.5%（「とてもそう」＋「まあそう」の％）が感じている（図 4-9）。そして実際に「高校関係者との意見交換」を行っているのは 14.0%、「対象者の高校での履修状況等の把握」を行っているのは 9.9% に過ぎない（図 4-8）。今後、入学前教育を充実させていくためには、高校と大学との情報交換も必要となるだろう。

（ベネッセ教育総合研究所 研究員 吉本真代）

* 1 高等学校におけるキャリア教育の推進に関する調査研究協力者会議 2006『報告書～普通科におけるキャリア教育の推進～』、中央教育審議会 2011『今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について（答申）』など。

3-1. 新学習指導要領実施後の変化

新学習指導要領の実施により、高校で言語活動が増加。

新学習指導要領の実施による高校での教育活動の変化についてたずねた。新学習指導要領で提唱されている活動の中でも「増えた」(「かなり増えた」+「少し増えた」)との回答が最も多かったのは「言語活動」の64.8%であった。次いで「アクティブラーニング(グループワークや討議、プレゼンなど生徒の能動的参加を取り入れた授業)」が52.9%と続いている。また、「キャリア教育」も半数の高校で、「増えた」(51.8%)としている。これらを属性別にみると、「キャリア教育」については普通科の四年制大学進学率別に大きな違いがみられた(図3-2)。四年制大学進学率「30%以下」では「増えた」が62.5%と最も高くなっている。「キャリア教育」の総時間数が多いかどうかは従前の「キャリア教育」の取り組み度合いにもよるのでわからないものの、少なくとも新学習指導要領を受けてより変化しているのはこの層のようだ。

Q

新学習指導要領の実施によって(平成22～24年度の先行実施も含む)、貴校では次の学習や活動が実施前と比べるとどれくらい増えたと思いますか。

図3-1 新学習指導要領実施後の変化(全体) **高校**

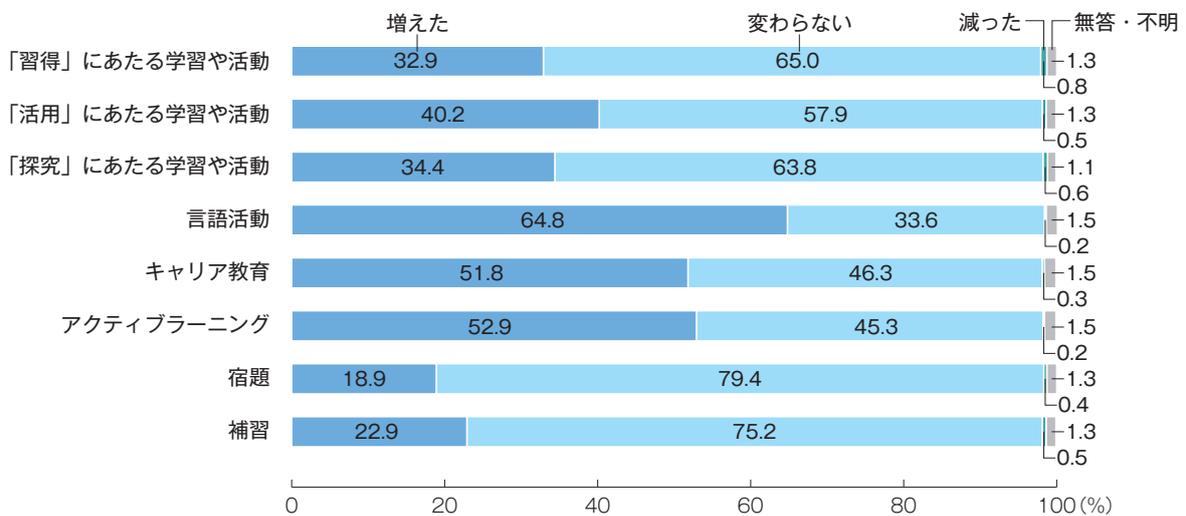
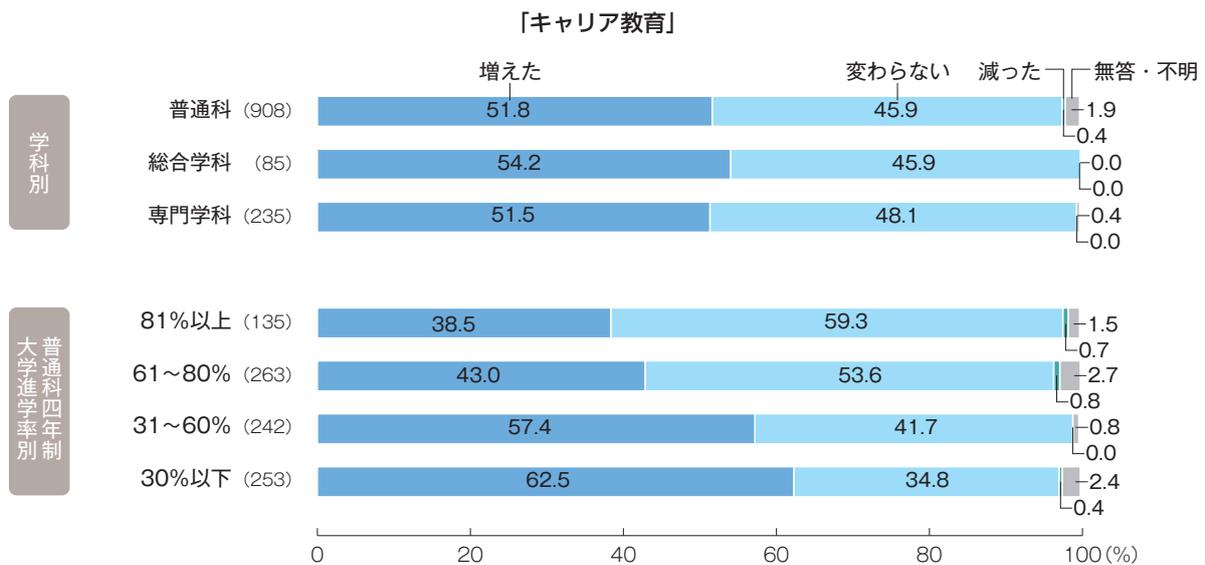


図3-2 新学習指導要領実施後の変化「キャリア教育」(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注) 図3-1、図3-2とも、「増えた」は、「かなり増えた」+「少し増えた」の%、「減った」は「かなり減った」+「少し減った」の%を表す。

3-2. 高校での新しい学力の育成

現在の大学入試のもとでは新しい学力の育成がすすまないと思うのは5割強。

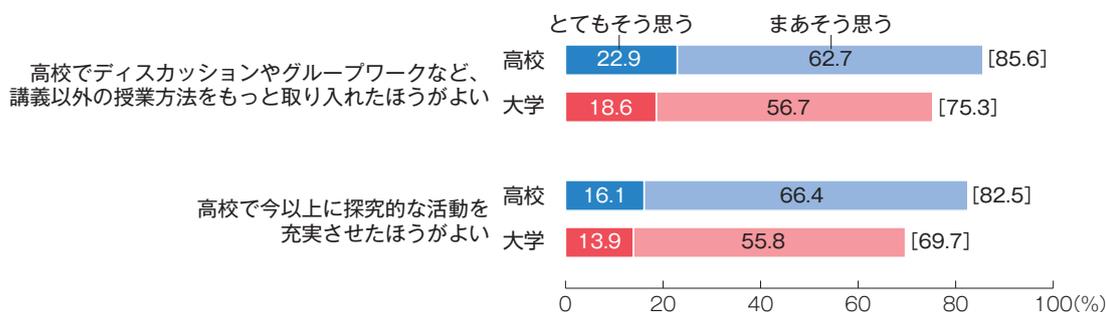
これからの高校教育における探究的な学びなどの新しい学力の育成に関してたずねた。まず、授業方法について、「高校でディスカッションやグループワークなど、講義以外の授業方法をもっと取り入れたほうがよい」は高校85.6%、大学75.3%が「そう思う」(「とてもそう思う」+「まあそう思う」、以下同)と回答している。次に「高校で今以上に探究的な活動を充実させたほうがよい」も高校82.5%、大学69.7%といずれの項目も高校・大学ともに高い肯定率である。

さらに、新しい学力の育成への現在の大学入試の影響についてたずねた結果が図3-4である。「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」の肯定率(「とてもそう」+「まあそう」)は全体で53.9%と約半数、普通科の四年制大学進学率別にみると、「61~80%」の層で63.1%と最も高い。

Q

高校と大学の接続に関する今後のあり方に関して、あなたはどのように思いますか。

図3-3 高校教育の今後のあり方について(全体) 高校 大学

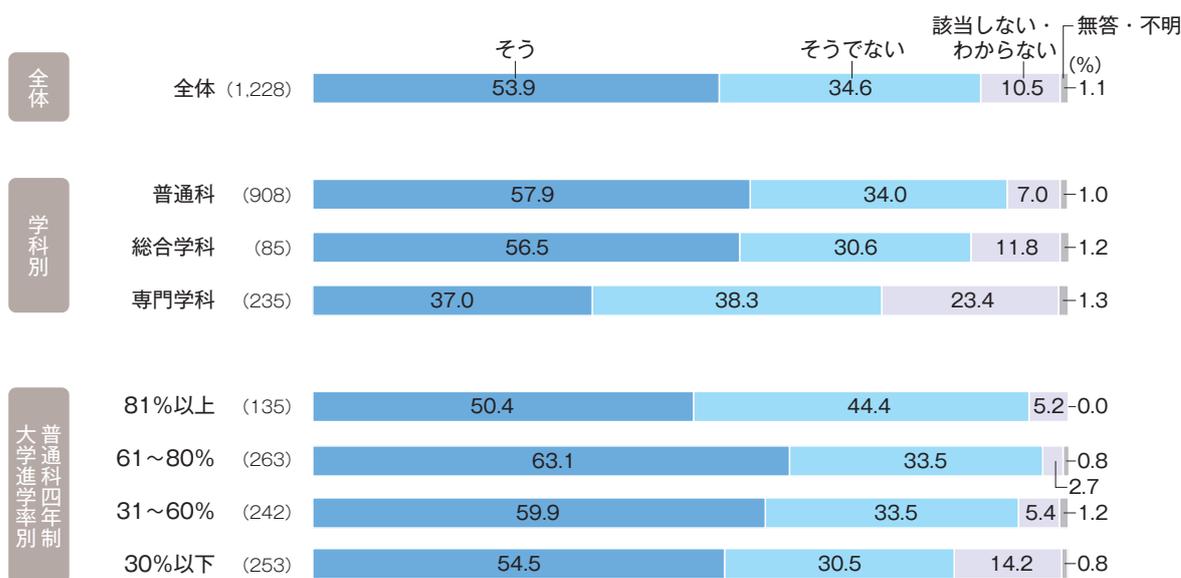


Q

貴校の大学受験における課題についてお聞きします。

図3-4 大学入試の新しい学力の育成への影響(全体・学科別・普通科四年制大学進学率別) 高校

「現在の大学入試のもとでは、「活用」や「探究」による新しい学力の育成がすすまない」



注) 「そう」は、「とてもそう」+「まあそう」の%、「そうでない」は「あまりそうでない」+「まったくそうでない」の%を表す。

3-3. 進路別のコース分けの実態と影響

進路別のコース分けを実施しているのは64.9%。

進路別のコース分けを実施している高校は64.9%で(図3-5)、そのうち、75.7%は「文系/理系コース」である。「文系/理系コース」分けの時期は「2年生4月」が89.2%とほとんどである。「進学者/就職者向けコース」を実施しているのが32.5%、「国公立/私立大学進学コース」は25.1%であった(図3-6)。

次に、「文系/理系」または「国公立/私立」別のコース分けをしている高校のコース分けのデメリットについての意識をみると、「早期に受験に向けたコース分けをすることで、生徒の進路選択の可能性が狭まってしまう」「早期に受験に向けたカリキュラムを学習させることで、バランスのよい学力を育成できない」のいずれも、肯定率(「とてもそう」+「まあそう」)は3割程度であった(図3-7)。

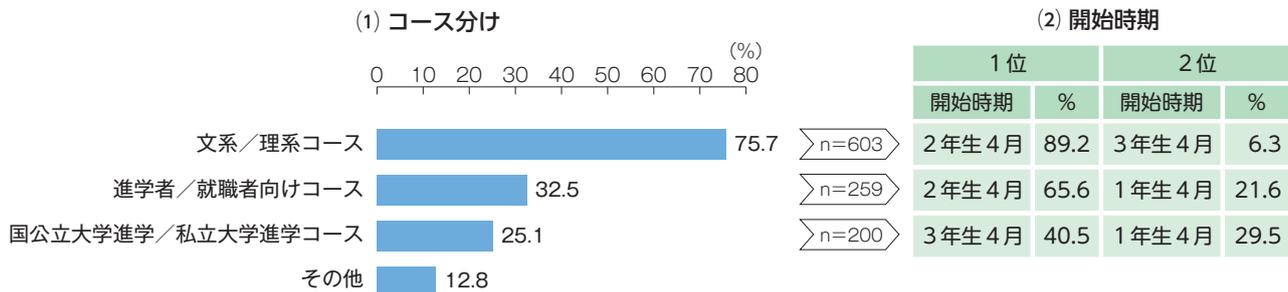
Q 貴校(募集定員がもっとも多い学科)では、進路別のコース分けを実施していますか。

図3-5 進路別コース分けの実施状況(全体) **高校**



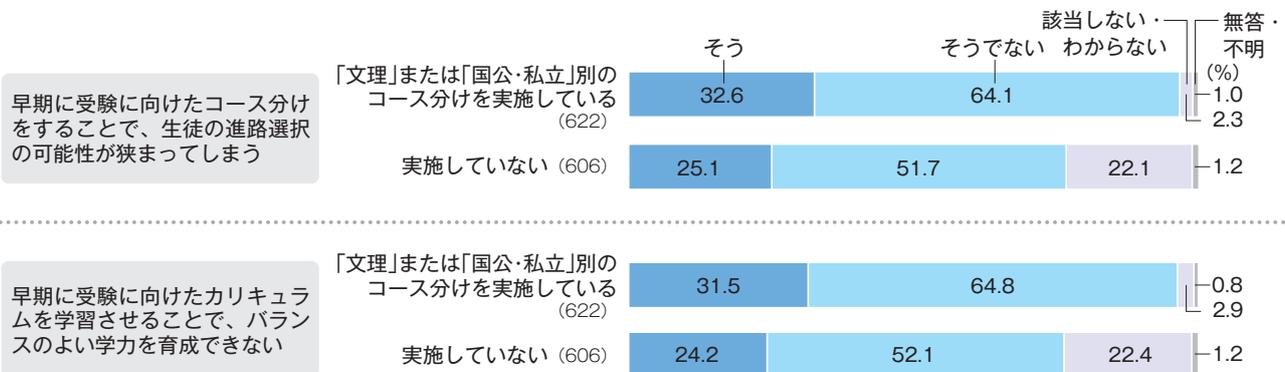
Q 「実施している」に○をつけた方にうかがいます。次のうち、どのようなコース分けを実施していますか。また、実際にコース分けが始まる学年と開始月もお答えください。

図3-6 進路別コース分けの実施状況(実施校) **高校**



注1) 複数回答。注2) 「(1) コース分け」の対象は、進路別コース分けを「実施している」と回答した797件。
注3) Σ〇は「(2) 開始時期」の質問の対象人数を表す。

図3-7 「文理」「国公・私立」別のコース分け有無別課題意識(全体) **高校**



注) 「そう」は「とてもそう」+「まあそう」の%、「そうでない」は「あまりそうでない」+「まったくそうでない」の%を表す。

3-4. 早期合格者に対する高校での取り組み

4割強の高校で、推薦・AO入試による早期合格者に対してセンター試験を受けさせている。

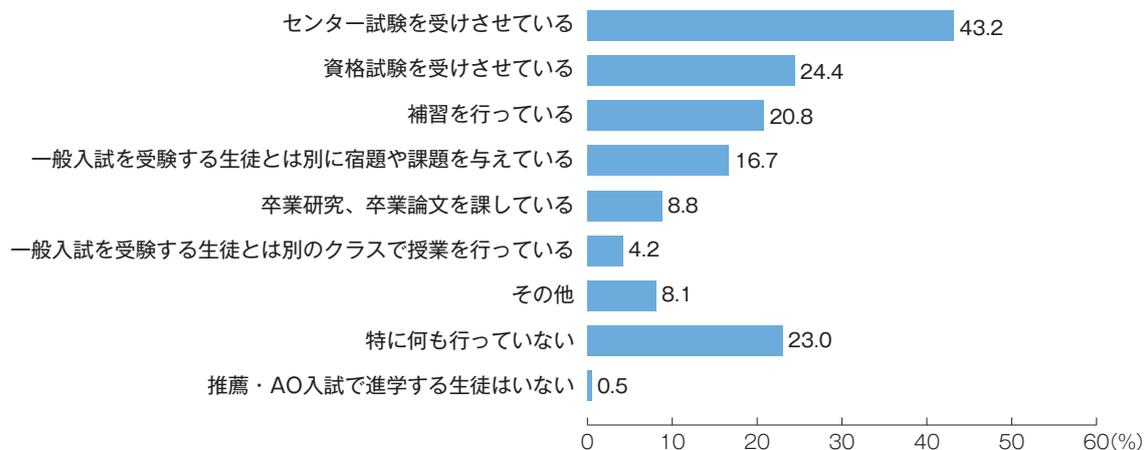
推薦・AO入試による早期合格者に対して、43.2%の高校が「センター試験」を、24.4%が「資格試験」を受けさせていると回答している。一方、4分の1の高校では「特に何も行っていない」となっている。

学科別にみると、普通科と総合学科では「センター試験を受けさせている」が、それぞれ50.6%、41.2%と最も多いが、専門学科については「補習を行っている」(43.8%)と「資格試験を受けさせている」(41.7%)が多い。

さらに、普通科の四年制大学進学率別にみると、「センター試験を受けさせている」のは進学率「31%以上」の層では6割前後となっているが、「30%以下」の層では3割となっている。

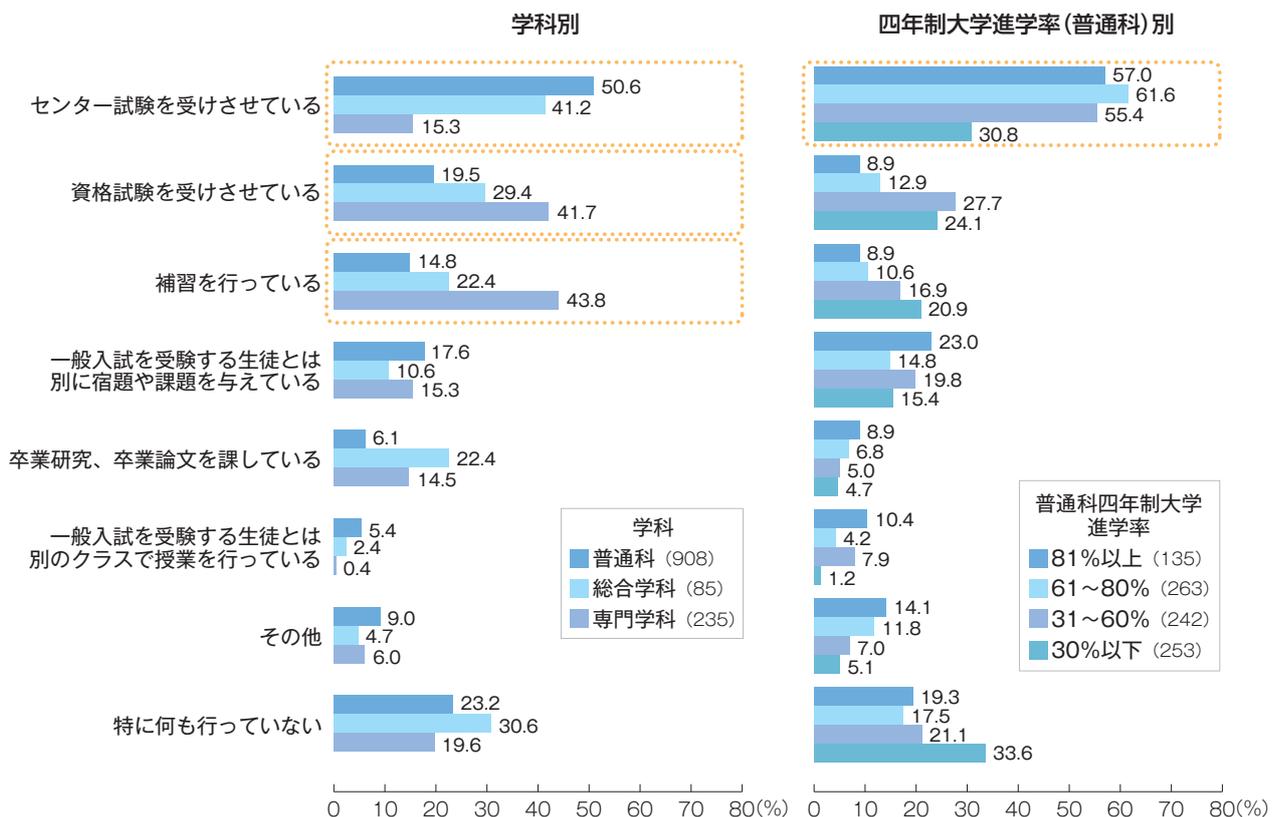
Q 貴校では、推薦・AO入試で早期に進学先が決まった3年生の学力を保证するために、次のような取り組みを行っていますか。

図3-8 早期合格者に対する高校の取り組み(全体) **高校**



注) 複数回答。

図3-9 早期合格者に対する高校の取り組み(学科別・普通科四年制大学進学率別) **高校**



注) 図の は、それぞれ学科別、進学率別に最大値と最小値に20ポイント以上の差があるものを表す。

3-5. 高校教育の役割

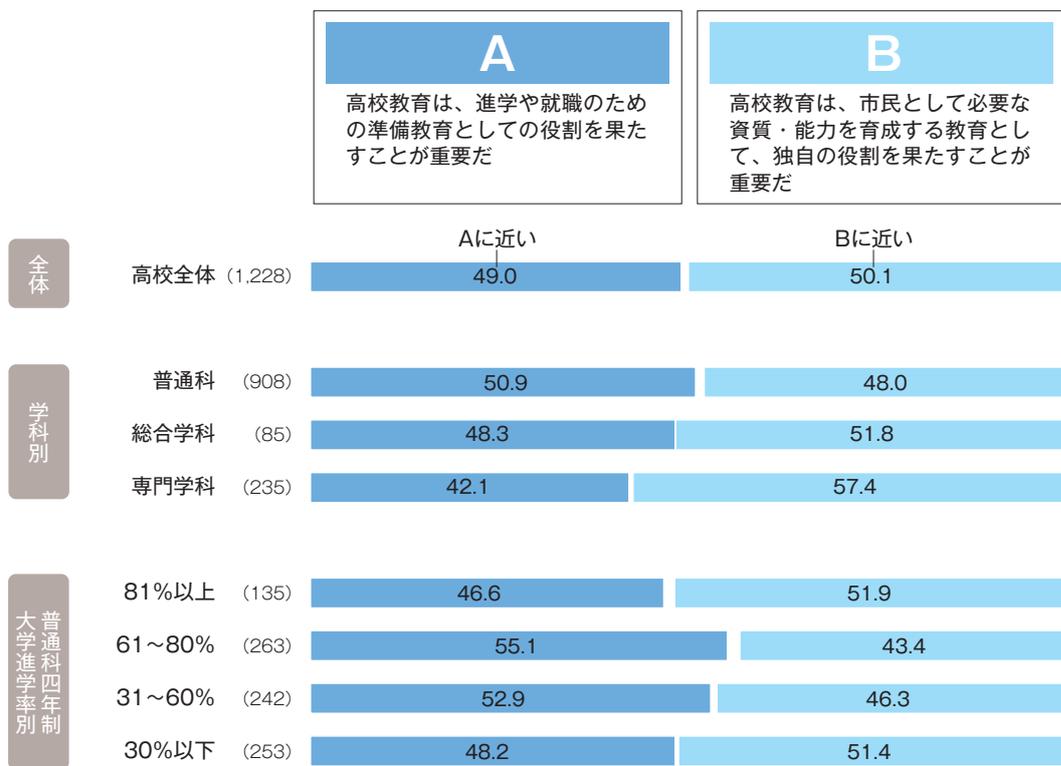
高校教育の役割が、「進学や就職のための準備教育」か「市民教育」なのは半々に分かれる。

高校教育の役割について次の2つの意見「A: 高校教育は、進学や就職のための準備教育としての役割を果たすことが重要だ」「B: 高校教育は、市民として必要な資質・能力を育成する教育として、独自の役割を果たすことが重要だ」のどちらに近いかをたずねた。結果は、高校全体ではA：49.0%、B：50.1%と、ほぼ半々に分かれた。学科別にみると、普通科、総合学科ではほぼ同じ割合だが、専門学科では、Bの方がやや多い。普通科の四年制大学進学率別には進学率「61～80%」の高校でややAの方が多くなっているが、あまり違いはみられなかった。

Q

あなたの意見はAとBのどちらに近いですか。

図3-10 高校教育の役割に対する考え(全体・学科別・普通科四年制大学進学率別) 高校



注) 「Aに近い」は、「Aに近い」+「どちらかといえばAに近い」の%、「Bに近い」は、「Bに近い」+「どちらかといえばBに近い」の%を表す。